

『今物語』

竹村信治

—〈今〉の位相—

周知のとおり、『今物語』は序跋をもたない雑纂の説話集、つまりフレイムを明瞭な形でもたない作品である。したがって明示的な情報に基づいて作品世界や世界観を探ることがむづかしい。もともと、当初からの命名であるらしい題名に含まれる〈今〉の語は、一つの手掛かりになるかも知れない。『今物語』の〈今〉とは何か。それはどのような位相にある〈今〉か。まずはここから始めてみよう。

*

『今物語』の〈今〉を問おうとする時、収載話題の時間はまず確認しておくべきことの一つだろう。通説にしたがって編著者を藤原信実とすれば、その生存は治承元年（一一七七）

から文永二年（一一六五）二月二五日の間。収載話題の時間がこの範囲内に収まるならば、題名の〈今〉は編述主体の生存期に対応したものとよい。ところがこの作品の時間はこの範囲内におさまらない。明示されている時間の最下限は延応元年（一一三九）正月一九日晝（31）で信実の生存期に収まるが、最上限は藤原教通と小式部内侍をめぐる一件（26）で一一世紀も前半期に遡る。もし編著者が信実でなかったとしても、この時間の長さを生きた実体的な編著者は考えにくく、したがって、題名の〈今〉は編述主体の生存期に対応したものとすることができない。

こうして見ると、『今物語』の〈今〉をめぐる問題は、このような二百年余りの時間を抱え込む作品世界を〈今〉と名

付けるところにまずはあることにならう。これを考えるために収載話題の時間分布をみると、気付かれることが三つある。第一は、全五十三話がおよそ三期に分かれたれ、第二期にあたる一二世紀中後半期の話題が最も多いこと。年代不明話十三話を除く四十話中約二十話ある。この期は信実の父隆信（二一四二—二〇五）の生存期にあたる。隆信の交遊範囲を考慮してもう十年ほど遡らせれば、『今物語』話題年代分布の第二期はこれとちょうど重なり合う。知られるとおり『今物語』には隆信が「ある歌詠」として登場し（39）、第19話の「左馬権頭」も彼の事かと推察される。このように、いわば父の時代の話題を多く収めて『今物語』と名のる点、注意しておいてよいだろう。

時間分布の教える第二点は、類想話題が接続する場合に第二期と第三期が対照されることがある点。いわゆる歌徳説話として排された第10・11話がそれで、当代を末代と捉らえた上で「へ古」と「へ今」の連続が語られている。但し、第46話では承久の乱後の「世中のうつり」が話題にされ、「へ古」と「へ今」の断絶が語られもしている（後述）。

時間分布の教える第三点は、第二点とあわせて考えられなければならない問題だが、第一期と第二期との話題の連続が見られる点。第41話は著名な『後拾遺集』撰集時の通俊と兼方とのトラブルの一件、続く第42話は『千載集』撰進時の西

行の話題、両者は歌人の勅撰入集をめぐる自詠への執を語って連なる。また第24・23話なども同様の例とみられるが、さらに第二期の秦兼任（19）や兼弘（44）を「まことに兼久兼方などが子孫とおぼえていとやさし」（19）と第一期の人物と関係付けて評するなど注目される。

さて、以上のような所収話題の年代分布とその内容を見ると、この作品の視野にあるのは一一世紀前半以降、一二世紀中後半期を中において編著者の時代に至る三期で、第一期と第二期とは連続の相として、第三期と第二期とは連続・不連続の二相として捉らえられていることになる。そして見たように、第三期すなわち当代と前代との関係を語る部分では当代への「へ末代」意識も表明されている（11・46）。また一方、定家・家隆の和歌同心を語る第40話には「近頃和歌の道ことにもてなされ」と当代称揚の姿勢が見え、さらに妻や恋人の面影を幻視する話題として接続する第25・26話では、第三期に第一期が参照されてその連続が示されてもいる。これらを総合して判断するならば、作品は「へ末代」としてある現在（第三期）と前代（第一・二期）との連続・不連続の相を見定め、その両相を「へ今」として提示しようとしていると見做すことができるだろう。

しかし、『今物語』の「へ今」をひとまずこのように考えるとしても、第二期すなわち信実の父隆信の時代の話題の多さ

はどうだろう。因みに、「近き」頃の事として語られる年代不明話三話を含め、一三世紀の話題は十話程度に過ぎない。また第二期第三期とが対照される場合を取り上げたが、実はこのような配列をもつのはまれで、むしろ第二期の話題どうしが連なっている場合のほうが多い。さらに先に注意しておいたように、第二期の秦兼任・兼弘の「やさし」をわざわざ第一期の兼久・兼方を引いて評するなども語りの現在が兼任・兼弘の時代にあることを思わせ、作品の現在を第三期に認めるといくぶん不審な点が残るだろう。つまり、この作品は、話題年代の分布からすると、第二期をこそ編述主体の現在として語り、第三期をこれとの対照事例として批評しているといった趣なのである。このことはおそらく作品の語る〈今〉の位相にかかわる問題だろうが、次にこれを別の角度から考えておくことにしよう。

*

『今物語』の〈今〉を問う上で従来注目されている事柄に集録された話題の属性がある。これも知られているとおり、『今物語』に収載される話題は〈あはれ〉〈ふしぎ〉〈おかし〉の三世界、言い換えると風雅世界・神仏靈験世界・滑稽世界にわたり、またそれぞれは大きな群をなしている。これを世界観の直接的な反映とみれば、作品は世界を三つに分節し

て把握し表現していることになろうし、風雅に王朝的美意識を、靈験に平安中世兩期にわたる宗教性を、滑稽に現実的世俗性を重ね合わせれば、宗教的靈験を問において〈古の雅〉と〈今の俗〉とを対置した構図が見出される。そしてこの構図を、王朝思慕から現実の直視への展開として読み取るならば、作品は、主調低音として末代意識を響かせつつ、王朝世界の継続を幻視し卑俗化する現実を直視して〈今〉を物語っていると理解され、前節に見た話題年代の分布およびその内容から推量された〈今〉観との符合を、ここに確かめることもできるだろう。

けれども、話題群や配置そしてそれらへの意味付けによるこのような理解は、作品表現の実際に見合ったものとはなさない。

たとえば第46話。これは、貴人の住吉参詣を知った津守経国が事前に社殿を掃除しておくように命じたところ柱・長押・妻戸に書きつけてあった詠歌を神官がすべて削り捨てたとの一件に、それを見た「古き尼」が「世の中の移りにければ住吉の昔のあともとまらざりけり」の一首を新たに書きつけたとの後日譚を付す話題。一話は、「世々を経てこの道照す住吉の神」（『後鳥羽院熊野幸記』）への歌人たちの信奉を前提に、その証を落書きと見做す鳥濱、また張本がほかならぬ神官であった事象の深刻さを語る。同様の話題は『古今著聞集』『増

鏡』に見えてゐるがそれらは後嵯峨院御幸の折のこととされる。『今物語』話は冒頭に「承久の頃」とおき、末尾に「これは承久の乱の後、世の中あらたまりける時の事なり。」と記す。承久の乱が在京貴族にどう受け止められたかの一々はいま略すが、和歌を介して後鳥羽院仙洞、順徳帝内裏に連なることのある編著者藤原信実にとつても、この事件は時代の変節を切実に感じさせるものであつただろう。したがつて、本話題はそのような編述主体の現実認識にこそ響き、古き尼の詠歌への共感とともに末世の〈今〉を確認させる出来事として採択収載されたものと見做すことができようである。

しかし、ここで本話題の語る鳥澁、あるいは慨嘆の類型性といったことに目をとどめてみよう。同題の話題が後嵯峨院御幸の折のこととして『古今著聞集』『増鏡』に見えることは今述べた。さらに『今鏡』にも同様の話題は見える。すなわち業平と王侍従(宇多院)との相撲の際に折れた御倚子の腋掛について、何某が「蔵人になれりける時、紫檀のきれ、殿に申して、その高欄の折れたる、繕はむなどせられけるこそ、をこの事には侍りけれ」(ふちなみ上)とあるのがそれ。岩瀬本『大鏡』(第一巻)には「その折れ目今に侍る也」とあるが、『今鏡』では「代々さてのみ折れながらこそ侍るなるに近き御代に」としてこの一件が語られる。〈古〉を慕う共同性の断絶を語る物語。もう少し具体的に即していえば〈古を

現在に伝える物の価値を解さず新たに作り替える鳥澁とその蛮行への嘆き〉の物語類型とでも括れようか。それは、「何事も古き世のみぞ慕しき。今様はむげに賤しうこそ成り行くめれ。」と明言する『徒然草』が、「車もたげよ」を「車もちあげよ」に、「火かかげよ」を「火かきあげよ」にと、意味の明示性を優先して言い方をあらためる風潮を、「口惜しうこそ成りもて行くなれ」と嘆いた(22)嘆きとも同質のものであろう。こうして、「近き御代」の鳥澁や今様は、承久の乱にかかわりなく、末代観と結んでいつも嘆かれることがらとしてあつたのである。

ところで、このような嘆きや末代意識の位相を確かめるためには次のような事例が有効かもしれない。まずは『枕草子』「清涼殿の丑寅の角」段にみる一条帝・女房の発言。

・「我は三卷四巻をだにえ見はてじ。」(一条帝)

・「昔はえせ者なども皆をかしようこそありけれ。」(女房)

二つ目は『愚管抄』巻三、花山院条。

・寛平マデハ上古正法ノ末トオボユ。延喜天曆ハソノ末、中古ノハジメニテ、メデタクテシカモケデ(ダ)カクモナリニケリ。冷泉田融ヨリ白河鳥羽ノ院マデノ人ノ心ハ、タダ同ジヤウニコソ見ユレ。後白河院末ヨリムゲニナリ劣リテ、コノ十廿年ハツヤ〜トアラヌ事ニナリニケルコソ。(類同記事、巻六・巻七)

次は『花園院宸記』文保元年五月一五日条裏書。

・永承寛弘非^三末代。又治承建保弘安等、又強不^レ可^レ謂^二代末^一。

今一つ、『徒然草』14段から。

・「歌の道のみにしへに交らぬ」など言ふこともあれど、いさや。……『梁塵秘抄』の郢曲の言葉こそ又あはれなることは多かれ。昔の人は、ただいかに言ひ捨てたることぐさも皆いみじく聞ゆるにや。

ここから確認できるのは、それぞれに〈古〉が聖代化され当代への嘆きや末代意識が表明されていること。そして嘆かれ末代と観ぜられた時代が次代には慕わしき〈古〉に変貌していること。村上朝との対比に慨嘆された一条朝は、慈円によれば延喜天曆の治政と「タダ同ジャウニ」見え、慈円によって「ムゲニナリ劣」とされた後白河院代以降十廿年は、花園院や兼好から見れば「代の末と謂ふべからず」、「あはれなること」ある「昔」となる。拡大する〈古〉と嘆かれ続ける〈今〉。その背景には衰退史観の継承があろう。とともに『枕草子』『徒然草』の引用に施した傍線部の対応などを見ると、『徒然草』は『枕草子』の嘆きを嘆いているとも判断され、そこに衰退史観パラダイムの模倣行為といったことが窺われる。先の、『今鏡』『今物語』『古今著聞集』『増鏡』に同趣の話題が時代を変えて語られるのも同じ事情によっていよう。

語型はパラダイムの表現としてこそあり、語型の踏襲がパラダイムの継承を導く一方、パラダイムの模倣は類話の諸書収載を結果させるのである。

さて、このような事例のなかに『今物語』の慨嘆を措いてみると、承久の乱に深くかわるとしたその慨嘆は、固有の現実認識に直接響いてのものというよりすでに類型と化した慨嘆であった事情が思われるであろう。嘆きは文字どおり嘆きには違いないのだが、それは迎え取られた嘆きであり、したがって嘆きと結ぶ末代意識もまた迎え取られた末代意識にほかならなかつた。『今物語』の嘆きや末代意識は既成のパラダイムを介している。そして作品の〈今〉はそのような模倣行為、あるいは〈なぞり〉(尼ヶ崎杉『ことばと身体』)を通して形作られてくるものとなっているのである。

*

類型化された嘆きを嘆き、既成の末代意識を型どおり話題になぞり直す『今物語』。しかし、作品に持ち込まれているパラダイムは嘆きと末代意識にとどまらない。『今物語』を覆う三世界、風雅・靈驗・滑稽もまた既成のそれらの枠内にある。風雅はたとえば「みそのの尼」(23)「東山の女」(24)の悲恋物語と『源氏物語』詩木卷「雨夜品定め」で紹介される左馬頭が童の折に聞いた昔物語とを読み比べればよくわか

る。靈驗諸話は『俊頼髓脳』の神仏詠歌譚に例がある。滑稽については導師・説経師・念仏者の〈尻〉〈はこ〉〈性器〉の話題である点、『沙石集』にも同様の話題が見られるところから当代性が指摘されるけれども、『播磨風土記』神前郡条の大汝命や『古事記』天石屋戸条の天宇受売命の昔から、糞と性器は笑いの起爆装置。『落窪物語』にも典葉助の「ひりかけ」があった。『今物語』はそのような笑いの伝統に即して当代の滑稽話題を拾い上げているのである。

こうして、この作品においては、風雅も不思議も滑稽もそしてまた嘆きも、既成のバラダイムの模倣行為の内に語られている。このことは、先に見た本作品の収載話題に第二期、即ち信実の父隆信の時代の話題が多いことと関係していないだろうか。この間の事情を考える際、畠山本『今鏡』が信実所持本の写しであった事實は、模倣行為の〈本〉としてあるバラダイムの習得経緯を窺わせて興味深い。『今鏡』の読者であった信実を考えれば、物語の歴史叙述を特色とする『今鏡』のバラダイムを信実が模倣し、そして『今物語』にそれを跡付けるのは簡単な事だろう。また『今鏡』の著者が経とその子隆信が生きた時間は『今物語』話題年代分布の第一・二期をほぼ覆うが、信実が祖父・父と同じバラダイムを生きようとしたなら、一二世紀の話題が〈今〉の話題として語られるのはありうることだろう。

『今物語』の〈今〉の位相。それは、編述主体の現在というより彼の〈なぞり〉の〈本〉となったバラダイムあるいは〈心身態勢〉(尼ヶ崎前掲書)の現在化としてあった。そして彼の生きる現在はそのバラダイム・〈心身態勢〉を骨肉した彼の〈現在〉から批評される。

翻ってみれば、しかしこのような世界への向かい方は『今物語』に限ったことではない。たとえば中世女流日記文芸の多くが自らの現実を物語の女性(浮舟等)の〈なぞり〉を通じて再構成しているところや『平家物語』等の軍記の歴史解釈のあり様にも同様の姿が指摘できるだろう。また、『徒然草』が皇居やその儀式空間に〈古〉に連なる〈今〉を求め(23・24・27・28)、〈古〉を体現する人の振舞を取り上げ(31・36・37・43・48等)、〈古〉物語的情景を〈今〉の体験として描き出して見せる(32・44)なども近かるう。そして何よりも和歌。その意味で、『今物語』の〈今〉の位相は決して特異なものではない。

『今物語』——その編述主体は、既成の視線を通して世界を見つめ、直に現在を見つめることがない。それにしても彼を、いや彼等を模倣行為に向かわせたものは何だったのだろうか。〈古〉との断絶の自覚か。しかし、作品にそれほどのイデオロギー臭はない〈なぞり〉の競演……。

〔たけむら・しんじ 広島大学教育学部助教授〕